

【範囲】

西田幾多郎全集4巻282頁14行目~284頁8行目

【キーワード又はキーセンテンス】

併し所謂自己同一とは主語面に見られたる自己同一であって、更に述語面に於て見られる自己同一といふものがなければならぬ。前者は単なる同一であって、真の自己同一は却って後者にあるのである。(283頁8行目~10行目)

【考察及び問い】

主語面に於て見られる自己同一ではなく、述語面に於て見られる自己同一を真であると西田はいう。これは円錐の頂点にある主語面（個物）が述語面に深く落ち込んで行くこと（283.12）であり、述語面自身が主語になること（283.13）である。

述語面が自己自身を無にすること。単なる場所となること（283.14）その時述語面に於て自己同一が成立していると考えられる。それはどのような事態なのだろう。また、主語面に見られる自己同一と述語面に於て見られる自己同一はどう違うのだろうか。